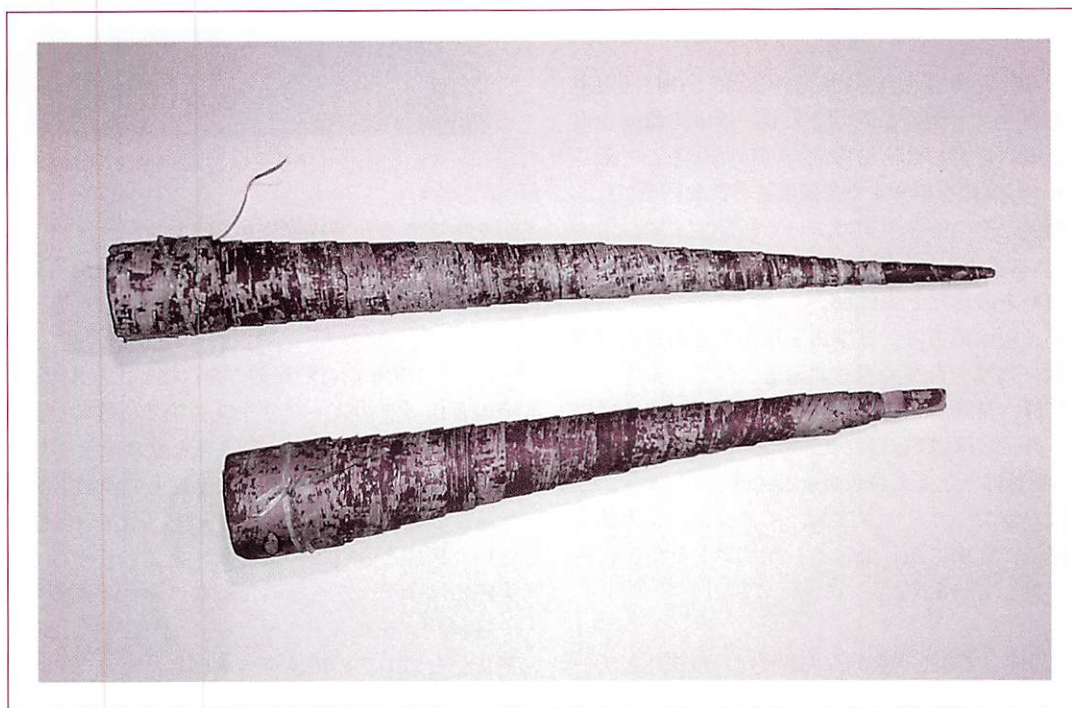




# 北方民族博物館だより

## No.68



白樺樹皮製おとり具<シカ笛> ウデヘ (H17.19 . H17.20)  
ロシア/沿海地方/クラスヌィ・ヤール  
2005年 ヤコフ=T=カンチュガ制作

上 長さ67.8cm  
下 長さ54.0cm

写真の資料は、9月の半ばから10月の半ばに、アカシカのオスを狩猟時に使用する道具。繁殖期のオスの声をまねて、オス呼び寄せる。全体は白樺樹皮製で、接着にはコクチマスやカワカマスなどのニカワを使用している。上は吸うタイプのシカ笛で、下は吹くタイプである。吹き方によってアカシカの年齢を表現することが重要であるという。クラスヌィ=ヤール村でペットボトルが手に入るようになってからは、リードの部分をプラスチックでも作るようになった。

- 1 表紙 白樺樹皮製おとり具<シカ笛>
- 2 平成19年度企画展「森の人ウデヘ」
- 5 「オホーツクブルー展」/研究紀要17号の発行
- 6 INFORMATION

平成19年度企画展

# 『森の人ウデヘ —ウスリー・タイガに暮らす』

2008.2.2-3.23

このたび、(財)北海道北方博物館交流協会、(財)北海道文学館、北海道立文学館のご協力により、絵本の原画と当館所蔵の民族資料を合わせ、沿海地方の自然やそこで暮らす先住民ウデへの文化を紹介する企画展をおこないました。以下で本企画展とその関連事業について紹介します。

## ロシア・沿海地方の自然と先住民

ロシア連邦・沿海地方は、日本海を挟んで北海道のほぼ対岸に位置し、気候や自然環境も北海道に似ています。

沿海地方には、常緑針葉樹と落葉広葉樹が混生する「ウスリー・タイガ」と呼ばれる森が広がっています。森を構成する植物の種類はほとんどが北海道と共通していますが、動物の種類は豊富で、リスやクマ類、イノシシ、シカ類のほか、近年絶滅の危機に瀕しているシベリアトラやアムールヒョウも生息しています。

この地域に居住してきた代表的な先住民は、ウデへとナーナイです。ウデへは、おもに沿海地方、ハバロフスク地方にまたがって日本海沿いに連なるシホテ・アリニ山脈の周



辺を生活圏としてきました。またナーナイは、シホテ・アリニ山脈と並行して北に流れるウスリー川沿いの地域に居住してきました。

今から100年前に沿海地方を探検したアルセーニエフは、その著作『デルス・ウザーラ』でこの地の自然や人びとの暮らしを描きました。「デルス・ウザーラ」は、道案内役として彼の探検隊と行動をともにした先住民の名前です。作品のなかで、デルスは「ゴリド」（現在の自称はナーナイ）という民族とされていますが、言葉の特徴などから、彼が実際にはウデへだったのではないかと考える人もいます。

『森の人 デルス・ウザーラ』（群像社刊、2006年）は、アルセーニエフの作品を絵本にしたものです。本コーナーでは、この絵本の原画となったハバロフスク在住の画家G.D.パヴリーシンの水彩画28点を展示しました。これらの作品には、物語の場面とともに、100年前の沿海地方の壮大な風景、森林の様子、アカシカやトラなどの野生動物、そしてウデへの狩りの様子などが繊細な筆致で描かれています。

## ウデへの伝統的生活

ウデへのおもな生業は狩猟で、シカ類やイノシシ、クマ類、イタチ類、ガン・カモ類、エゾライチョウなどを捕獲し、その肉や毛皮を自家消費するだけでなく、交易品としても利用してきました。その他、サケ類やコイなどの漁撈、交易品としてのチョウセンニンジンの採集も重要な仕事でした。

自然の産物を利用してきたウデへは、自然界の〈主〉としてトラやクマなどを崇拝していました。また、「シャマン」と呼ばれる霊的能力者の力によって、病気の治療や、狩猟・漁撈の成功をもたらすといった「シャマニズム」の信仰が広くみられました。

本コーナーでは、ウデへの狩猟用衣服や鹿笛といった狩猟に関する民族資料のほか、毛皮を加工するための皮鞣し具などを展示しました。



水彩画と民族資料で描く「デルス・ウザーラ」の世界

観覧無料

森の入りウデへ  
ウスリー・タイガに暮らす

協賛 財団法人北方博物館交流協会

北海道立北方民族博物館 平成19年度企画展

（2008年）二月二日（土）三月二日（日）

（休館日）月曜日（月）日は開館、二月二日（土）

開館時間 九時三十分～十六時三十分

会場 北海道立北方民族博物館

北方民族博物館

### クラスヌィ・ヤール村と現在の狩猟

数家族単位で移動生活をしてきたウデヘは、ソ連時代の集住化政策の結果、いくつかの集落に定住するようになりました。

ウデヘの人口は1657人（2002年現在）で、クラスヌィ・ヤール村（人口約700人）とアグズ村（人口約250人）に比較的多数が集まって生活しています。そのうちクラスヌィ・ヤール村では、住民の大多数がウデヘを始めとする先住民です。

クラスヌィ・ヤール村では、現在も狩猟が重要な生業になっています。ソ連時代にはゴスプロムホーズと呼ばれる国家狩猟組合、民主化後は株式会社「ピキン」と民族組合「ティェグル」によって、周囲の狩猟用地が管理されてきました。現在、村の猟師たちは民族組合「ティェグル」に所属し、そこから割り当てられた狩猟用地で狩猟をおこなっています。

現代の狩猟の様子やクラスヌィ・ヤール村での暮らしについては、福持英助氏が撮影した人物写真によって紹介しました。



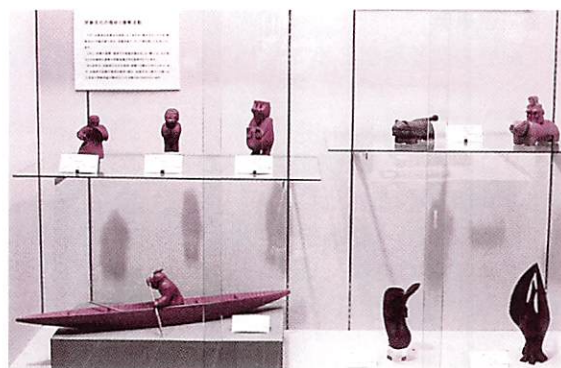
### 民族文化の現状と復興活動

ウデヘは固有の民族文化を持っていますが、現在のロシアでは、普段はロシア風の家に住み、洋服を着て、ロシア語を話して生活しています。

しかし、狩猟や漁撈、森林での採集活動をおこなう際には、丸木舟などの伝統的な道具や民族知識が今も利用されています。

また近年は、伝統的な文化の保存・復興にも関心が向けられています。伝統的な衣類や道具の保存・復元、伝統文化に根ざした新たな工芸品や美術作品の創出といった活動もおこなわれています。

このコーナーでは、伝統文化をモチーフとした彫刻や現代風にアレンジされた工芸品を展示しました。



### ウデヘ語の現在

現在、ウデヘやナーナイを含むロシア・沿海地方の先住民の間では、民族固有の言葉が次第に失われつつあります。ウデヘ語についても、自由に話せる人は、100人に満たないとされています。クラスヌィ・ヤール村の学校ではウデヘ語の授業もおこなわれていますが、子どもたちがウデヘ語を自由に話せるほどにはなっていないようです。

ここでは、ウデヘ語の授業で使われている教科書や辞書、そしてウデヘ語を後世に残そうとする人びとのノートなどを展示しています。

### ウスリー・タイガの現状と課題

クラスヌィ・ヤール村では、現在も狩猟や森林生産物の採集が重要な生業となっています。村を取り巻く広大なウスリー・タイガが、狩猟対象となる動物を始めとした豊かな動植物相を育み、こうした生業を成立させているのです。

しかしこの豊かな森林は、近年日本、韓国、中国など海外向けの木材の生産地として注目を浴び、大企業による大規模な伐採の圧力が高まっています。

ウデヘを始めとする先住民は、こうした動きに対抗し、森林の保護と持続的な利用を進めるための活動をおこなっています。

本コーナーでは、クラスヌィ・ヤール村と日本のNGOが協力しておこなっているエコツアーなどの試みを写真やパンフレットで紹介しています。

以上の他、展示内容をより深く理解いただくため、ウデヘ語のCDブックコーナー、参考図書閲覧コーナー、ウデヘの民族衣装体験コーナーなどを設けました。

### 謝辞

この展示をおこなうにあたり、次の団体、個人の方に実物資料、写真、情報提供などについてご協力いただきました。記して感謝いたします。

（財）北海道北方博物館交流協会、（財）北海道文学館、北海道立文学館、国際環境NGO FoE Japan、網走市立図書館、クラスヌィ・ヤール村（ロシア連邦）、舟山廣治氏、福持英助氏、津曲敏郎氏、風間伸次郎氏、佐々木勝教氏、A. F. スタルツェフ氏、徳島県立博物館

## 企画展関連事業

本企画展の関連事業として、次のような催しをおこないました。

### 講演会「ロシア・沿海地方の森と人びと」

日時：2008年2月2日（土）

講師：津曲敏郎氏（北海道大学大学院教授）、野口栄一郎氏（国際環境NGO FoE Japan ディレクター）、A. カンチュガ氏（ウデヘ文化伝承者）

まず、「森の人デルスとそのことば」と題して、津曲講師に講演いただきました。津曲氏はウデヘ語を含むツングース諸語を研究対象とする言語学者であり、沿海地方で精力的にフィールドワークをされています。講演では、言語学者の視点でアルセーニエフの著書『デルス・ウザラ』を分析し、この作品が事実をありのままに記録したものではなく、さまざまな点で脚色された文学作品であることを報告されました。

次に野口講師によって、「知ろう まもろう ウスリータイガ ービキン川のウデヘの人々とともに」という表題で講演いただきました。講演では、環境NGOの職員としての経験から、沿海地方の豊かな自然や森林伐採の問題、そしてクラスヌィ・ヤール村の方々と協力して進めてきた環境保護活動について紹介していただきました。



野口栄一郎氏

最後に、クラスヌィ・ヤール村からお越しいただいたウデヘ文化伝承者のA. カンチュガ講師から、「森の人ウデヘの暮らし：カンチュガさんに聞く」という表題で講演いただきました。この講演では、講師の自己紹介後、ウデヘの伝統文化や講師自身の少年時代・青年時代の体験について、参加者からのさまざまな質問に答えるという形式をとりました。会場からは、ウデヘの狩猟儀礼や植物の利用法、現代の村での暮らしなど多岐に渡る質問がありました。



A. カンチュガ氏（左は通訳の佐々木勝教氏）

## 展示解説会

日時：2008年2月3日（日）

解説：中田篤（当館学芸員）

本企画展の内容や背景についてより深く知っていただくために、オープン後最初の日曜日に、担当学芸員による解説会を開催しました。解説会を目的に来館された方だけでなく、ちょうどその時間に入館された一般観覧者も加わり、熱心な質問も寄せられました。

「大人も楽しむ読み聞かせ～絵本『森の人 デルス・ウザラ』を読む」

日時：2008年2月17日〔日〕、3月15日〔土〕

読み聞かせ：

「朗読ボランティア 声の図書館 そよかせ」（網走市）の皆さん



本企画展では、絵本『森の人 デルス・ウザラ』の原画を展示しています。この絵の元になった物語を知っていただくことによって、作品をより深く味わっていただけるよう、網走市内の朗読サークルのみなさんに協力いただき、絵本の読み聞かせ会をおこないました。

この催しでは、特別展示室のなかに会場を設け、原画をご覧になりながら物語を楽しめるという形にしました。絵本は、全部朗読するのに1時間ほどかかる作品なので、4人の読み手が交代で担当しました。この催しには、地元市民のほか、ちょうど会場を訪れた遠方からの来館者も参加され、原画と語りによって創り出された独特の雰囲気味わっている様子でした。

（学芸グループ 中田 篤）

## 『オホーツクブルー展』

2008.1.10-1.17

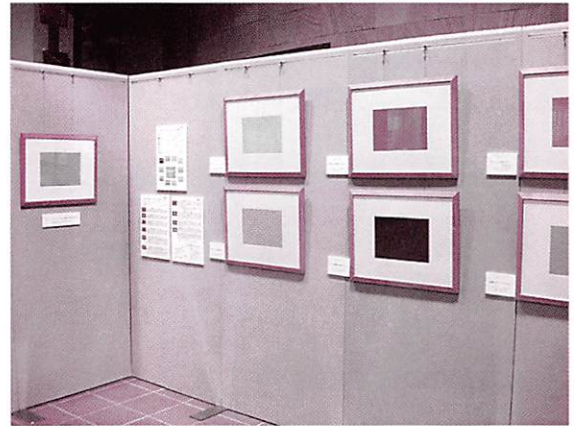
北海道網走支庁が進めてきた「オホーツク・エリア・アイデンティティ（オホーツクAI）」事業は、地域のシンボルカラー、キャラクター、シンボルマークを選定し、その周知・定着を図ってきましたが、その概要と成果を紹介するオホーツクブルー展が当館において開催されました。

初めに平成19年6月に決定された地域のシンボルカラーであるオホーツクブルーと、その色を決める際にベースとなった10種類のブルー、写真や絵、文章など一般公募作品約60点、オホーツク・シンボル委員会による選定過程、さらにブルーのイメージを風景写真のなかに表現した同委員会山本勝栄委員の作品5点などが展示されました。

次のコーナーではキャラクター「つくつくオホーツクくん」および多数の公募作品から決定されたロゴマーク（図）の原画と優秀賞作品3点が紹介され、さらにキャラクターの生みの親であるアーティスト大西重成氏の造形作品28点が展示され、大西ワールドの一端が紹介されました。

最後に、キャラクター、シンボルマークやイメージカラーが商品、印刷物などで利用された実績が展示され、オホーツクAI事業が地域に理解され浸透され始めたことを紹介しました。

（学芸グループ 渡部 裕）



### 北海道立北方民族博物館 研究紀要第17号の発行

B5判 全105頁

北の交換・交易—儀礼の杖と使者祭り 谷本一之

市場経済におけるマガダン州のトナカイ飼育 ハホーフスカヤ, L. N. (ボンダレンコ, O. V. 訳)

カムチャツカにおけるトナカイ飼育の課題 新たな政策とトナカイ飼育の意味 渡部 裕

〈調査報告〉フィンランドにおけるトナカイ牧畜とイナリ地方のサミ文化関連施設の現状について 中田 篤  
〈資料紹介〉

北海道立北方民族博物館所蔵の田辺尚雄氏樺太調査関連資料について(2) 篠原智花、笹倉いる美

〈資料紹介〉北海道立北方民族博物館所蔵の北西海岸インディアンの版画について 齋藤玲子

〈資料紹介〉加熱されたオホーツク土器

—北海道立北方民族博物館収蔵モヨロ貝塚出土完形土器を対象として 角 達之助  
のりすと 2007 —北方研究データベース— 笹倉いる美

## ロビー展

## こんにちはモンゴル

-海外協力隊員が見たモンゴルの今-

平成20年4月5日 [土] ~ 4月20日 [日]

会場 当館特別展示室

観覧 無料

スパートル市を中心としたモンゴルの人びとの生活や自然の風景を、海外協力隊員の視点で捉えた生き生きとした写真で紹介します。

## 【関連事業】

- ・私が見たモンゴルー街・草原・子どもたち  
4月12日 [土]  
講師：高橋久美子氏 (JICA国際協力推進員)
- ・学芸員講座①  
モンゴルの森林と遊牧民：トナカイ遊牧民ツアー  
タンの夏  
4月13日 [日] 講師：中田篤 (当館学芸員)

## ロビー展

## 大昔の大きな動物

-サハのマンモスを知ろう！-

平成20年4月26日 [土] ~ 6月25日 [水]

会場 当館特別展示室

観覧 無料

サハ共和国ではマンモスの骨や牙がたくさん見つかっています。このロビー展では、マンモスを中心に数万年前に生きた動物たちとその頃の環境を紹介します。

## 【関連事業】

- ・マンモス写真会 4月27日 [日]
- ・みんなが描いたマンモス展  
5月5日 [月] ~ 6月25日 [水]
- ・学芸員講座② サハ共和国の自然とマンモス  
6月7日 [土] 講師：角達之助 (当館学芸員)

## INFORMATION

## 行事報告

◆12月22日に、はくぶつかんクラブ「革のストラップと写真入れづくり」を開催しました。

◆1月5日 [土] に、はくぶつかんクラブ「イヌイトのヨーヨー」を開催しました。



◆1月12日 [土] に、はくぶつかんクラブ「フェルトのコースターづくり」を開催しました。



◆1月26日 [土] に学芸員講座「オホーツク文化の遺跡：能取岬西岸遺跡」を開催しました。

◆2月10日 [日] に北方民族博物館は開館17周年を迎えました。

◆2月16日 [土] に、はくぶつかんクラブ「スノーシュー (かんじき) であそぼう」を開催しました。

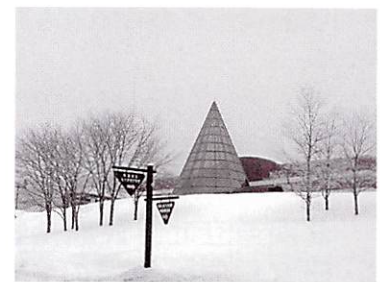


スノーシューをはいて雪上かるた

◆3月1日 [土] に、学芸員講座「ウイルトアのマンバッカ (手袋) づくり」を開催しました。

## 施設改修

博物館を大勢に快適に使っていただけるよう、点字ブロックの充実、点字案内板の設置、オストメイト対応トイレへの改修を行いました。



北方民族博物館だより  
No. 68

平成20(2008)年3月28日発行  
編集・発行 北海道立北方民族博物館  
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1  
電話 0152-45-3888 fax 0152-45-3889  
e-mail: tonakai@hoppohm.org  
http://hoppohm.org  
指定管理者  
財団法人北方文化振興協会